

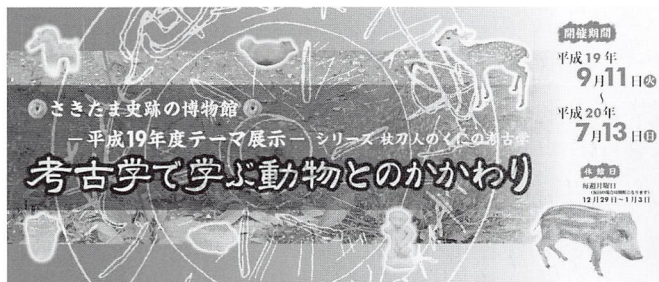
平成19年度テーマ展示「考古学で考える動物とのかかわり」 関連講座(さきたま講座)の要旨

さきたま史跡の博物館では毎年、企画展示室の展示を、考古学的なテーマで全面的に更新しています。平成19年度は平成19年9月11日から、上記テーマで展示替えを行いました。

この展示にあわせ、館で行っている考古学関連講座「さきたま講座」はテーマ展に関連した内容で6名の専門の先生方にお話しいただきました。先生方の熱のこもった講話に、聴講の皆さんからは要旨刊行の希望が少なからず寄せられましたので、各講座の要旨を以下に収載しました。

(さきたま史跡の博物館 資料・展示担当)

- | | |
|--------|--|
| 第1回講演会 | 演題「古墳時代の動物遺存体と交易」
日時 平成19年9月22日(土)
講師 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 赤熊浩一 氏 |
| 第2回講演会 | 演題「埼玉古墳群と馬」
日時 平成19年10月20日(土)
講師 鴻巣中学校 山川守男 氏 |
| 第3回講演会 | 演題「縄文時代の動物を考古学する」
日時 平成19年11月24日(土)
講師 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 新屋雅明 氏 |
| 第4回講演会 | 演題「古墳壁画の動物」(増補後「古墳壁画に描かれた他界」)
日時 平成19年12月22日(土)
講師 嵐山史跡の博物館 若松良一 氏 |
| 第5回講演会 | 演題「原始・古代の豚と猪」
日時 平成20年2月9日(土)
講師 国立歴史民俗博物館 西本豊弘 氏 |
| 第6回講演会 | 演題「古墳時代の馬具と馬」
日時 平成20年2月23日(土)
講師 朝日新聞社文化部 宮代栄一 氏 |



※本要旨は当日の講話を補足された部分や省略された部分があります。また、挿図等も当日のレジメと異なっている部分があります。

「古墳時代の動物遺存体と交易」

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 赤熊 浩一 氏



はじめに

遺跡の発掘調査をすると地中からさまざまなものが出土する。一般的に知られているのは、土器、石器、鉄器、木器などである。その中であって、今回、注目したのは、古墳時代後期にあたる下田町遺跡の大溝跡から発見された貝殻、魚の骨、動物の骨といった食生活を探る出土遺物である。中でも、ハマグリ¹の存在である。これら動物遺存体と人々のかかわりについて、「交易」をキーワードに考えてみた。海の幸が内陸地域に、一方、山の幸とも言うべき土師器や須恵器が東京湾岸の海岸地域から出土し、古墳時代の交易が浮かび上がってきた。

1 下田町遺跡の貝塚

熊谷市の下田町遺跡からは、古墳時代後期の貝塚が発見された。貝塚は、遺跡北側の第80号溝跡の覆土中に堆積し、多量の貝類、獣骨類、木器、土器などが出土した。貝塚は、海の貝で占められ、海水魚やイルカなどの動物遺存体も発見された。

遺跡南側に隣接する和田吉野川は、下流で入間川と合流し、東京湾へと通じている。この河川によって須恵器の大甕²を利用し、貝や魚などの海の幸が、この地域に運ばれたと想定される。

貝塚の貝種は、ハマグリ、マガキ、アカニシ、ウミニナ、オオノガイなどの海水貝とチリメンカワニナ、マツカサガイ、マルタニシなどの淡水貝が含まれていた。中でも、ハマグリは大量に捨てられており、形状の明らかなもので300片以上あり、殻の左が112片、右が195片を数え、左右の殻が検出され、少量だが合わさったままの貝もあった。このことから貝は生きてきたままこの下田町遺跡に運ばれてきた可能性が指摘できる。また、海水貝は、内湾産の貝であることから、東京湾の海岸線あたりで容易に採取され、搬入されたものであると考えられる。

このほか、貝塚からは、獣骨類として馬、牛、中型哺乳類、オオワシなどの大型鳥類、雉などの骨が出土し、甲殻類としてカニの甲羅や鉗脚（ハサミ）、カエル、魚類として魚鱗（ウロコ）、歯、主鰓蓋骨、下鰓蓋骨、前鰓蓋骨、鰭条（背びれ）を検出した。

大溝跡からは貝塚を中心として多量の土師器³が出土し、いずれも完形品が多く、模倣⁴坏、有段口縁坏、黒色有段口縁坏、黒色模倣坏、続比企型坏などのタイプのものが含まれている。このほかの土師器は、甕、壺、甗、高坏、手づくね土器、平底の鉢が出土し、須恵器では、大甕、中型の甕、小型の甕、甗、高坏が出土した。また、木製品では、ささら状製品、馬鋏、曲げ物、紡錘車、槽、田下駄、鋤、平鋤、横槌、堅杵、案、杭なども出土した。

貝塚は、これらの土器などから古墳時代後期末にあたる7世紀初頭段階であると考えられ、当時の人々が儀礼などの際に新鮮な海の幸を食していたことが想像できる。

2 古墳時代の貝を出土する遺跡

小林行雄氏の著書「黄泉戸喫⁵」の中で、古墳時代の遺跡から出土した食物の出土例は少ないが、

古墳の中に副葬された容器の中から、動植物の遺存体が出土する事例を紹介し、古くから知られている。古墳に副葬された蓋坏の容器の中に、ハマグリが検出された報告例は、福岡県宇野岩木屋の群集墳、岐阜県美濃加茂市古井町二ツ塚の円墳、愛知県犬山市の古墳、三重県名張市長尾七ツ塚古墳、三重県上野市王塚古墳などである。また、千葉県木更津市金鈴塚古墳からは、須恵器242個、土師器26個もの大量の土器が副葬され、坏の中から、カラスガイの小片、ウナギ、フナの魚骨が出土した。死者の葬送や黄泉の国への添え物としてハマグリが用いられたのであろう。

集落遺跡出土の貝には、古墳時代から奈良時代にかけて県内の遺跡からハマグリが出土した調査例が報告されている。

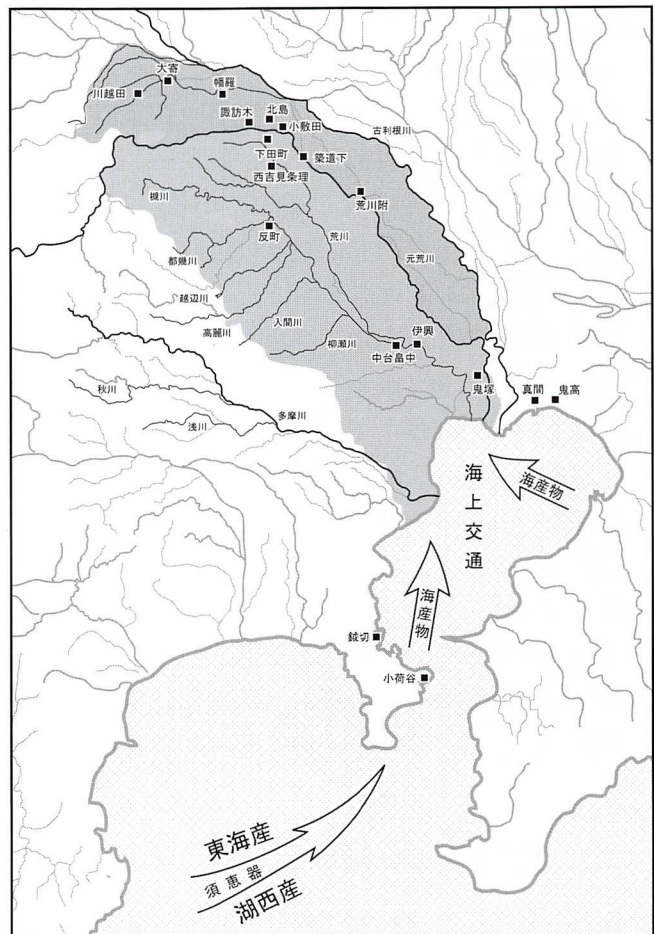
埼玉県岡部町（現深谷市）宮西遺跡は、古墳時代の集落遺跡である。遺跡は、北側に小山川が流れ、南側に志度川が流れる合流点に近接した位置にあたる。小山川は、北武蔵地域の中心河川であり、古利根川水系として東京湾岸からの交通要所でもある。古墳時代後期の溝跡の覆土からハマグリがまとめて出土した。

埼玉県深谷市幡羅遺跡第18次調査の廃棄土坑からは、獣骨とともにハマグリをはじめとする海の動物遺存体が多量に出土している。幡羅遺跡は、古代武蔵国幡羅郡の郡役所と推定されている。このため、役所の行事の際に利用された可能性が考えられる。幡羅遺跡は福川に面した段丘上に位置し、古利根川水系にあたる。

埼玉県熊谷市北島遺跡は、弥生時代、古墳時代から奈良・平安時代、そして中世に至る大規模集落である。遺跡南側には、星川が流れ下流8kmには、さきたま古墳群が位置し、元荒川水系にあたる。北島遺跡第19地点の低地帯から貝を検出した。この低地帯は、弥生時代から古墳時代後期まで維持されており、遺跡中央を南北方向に走る。低地帯のやや南側の位置に、二箇所には窪みがあり、ここに、多量の土器などと一緒には貝類が出土した。貝の種類は不明であるが、調査担当者によれば大きな貝が大量に出土し、ハマグリの可能性があったと見られる。検出された土器は、有段口縁坏と模倣坏、続比企型坏、高坏、鉢などである。

埼玉県熊谷市諏訪木遺跡は、忍川と星川に挟まれた集落である。集落内には、蛇行した河川跡が検出されている。その中でも、河川跡B・C地点からハマグリやアサリなどが検出された。河川跡B地点は、古墳時代後期の遺物が主体で土師器有段口縁坏、続比企型坏、身模倣坏、北武蔵型坏、高坏、壺、甕等を検出した。また、須恵器や木製品とともに、滑石製模造品、石製紡錘車が出土している。さらに、獣骨では、ウマ、シカ、イノシシ、イタチ、イヌ、そして、魚骨を検出した。河川跡C地点は、流路1と流路2に時期別に分かれる。流路1の主体は古墳時代後期である。また、流路2の主体は奈良・平安時代である。流路1では、祭祀用具が検出され河川祭祀の場所と考えられている。

埼玉県蓮田市荒川附遺跡は、古墳時代後期の住居跡の覆土中にアサリと見られる貝が検



第1図 貝を運んだ道

出された。本遺跡は、元荒川の右岸に形成された大集落である。

東京低地に立地する東京都足立区の伊興遺跡は、古墳時代後期にあたる時期の獣骨として、ウマ、ウシ、ニホンシカ、イノシシ、イヌ、タヌキ、イタチを検出した。また、キジ、コイ、サメの骨を出土している。さらに、種子では、モモ、スモモ、メロン類、ヒョウタン類、カボチャ近似種を認めた。

千葉県千葉市上ノ台遺跡は、縄文時代から奈良・平安時代までの複合遺跡であるが、古墳時代後期の集落は、漁村の可能性があると考えられている。このうち、3軒の住居跡の覆土中に貝塚を検出し、3D-56住居跡内貝層の出土貝類は、総計524点で、ハマグリが321点であった。このほかの貝は、シオフキ、マガキ、オオシジミであった。獣骨は、住居跡からウマ、ニホンシカ、ウシを出土している。魚類は、軟骨魚綱のネズミザメ目が1種、硬骨魚綱のタイ科が2種出土している。

千葉県市川市鬼高遺跡は、低湿地の遺跡である。遺跡は杭木の散在する地帯と貝塚とで構成されていた。杭木の地帯からは、土器のほか土錘、土玉、果実、獣骨、鳥骨、魚骨、魚鱗などを出土した。魚類の中には、マダイ、コチ、ヒラメなどの近海魚も見られた。また、貝塚は、1～2mの厚さに堆積し、ハマグリ、カキが主体である。

3 文献資料の海産物や河川交通

ここで、文献資料から海産物や河川交通についての記録を見てみる。平城宮跡から出土した木簡に二点

- ・「武蔵国男衾郡余戸里大贄鼓一斗 天平十八年十一月」（平城宮木簡1の404号）
- ・（表）「武蔵国秩父郡大贄鼓一斗」（裏）「天平十七年」（平城宮木簡1の406号）

この木簡に鼓（クキ）が貢納された記録が残されている。荒井秀規氏は、内陸の男衾郡や秩父郡から鼓が都に貢納されることよりも、鼓が、大豆と海草を原料として調理されたものであることに注目した。このことは内陸の男衾郡や秩父郡に海草が「流通」していたことを示す資料として指摘された。さらに、荒井氏は、「元荒川を通じて内陸部に運ばれた東京湾の海草と末野産須恵器が交易された可能性がある。」と述べている。

また、万葉集の第14巻、東歌に見られる河川交通について

- ・「埼玉の津に居る船の風をいたみ綱は絶ゆとも言な絶えそね」（3380）

現在の行田市にあたる、さきたまの津の様子である。時節の強風により停泊する船の綱がピンと張っている。船運で賑わっている状況がわかり、おそらく、元荒川を行き来する船がさきたまの入江に停泊していた様子である。

- ・「葛飾の真間の入江にうち靡く玉藻刈りけむ手児名し思ほゆ」（0433）
- ・「葛飾の真間の浦廻を漕ぐ船の船人騒ぐ波立ち」（3349）

葛飾は東京都葛飾区、埼玉県北葛飾郡、千葉縣市川市の江戸川の流域を示す。真間は、市川市真間のことでここに入江があったことがわかる。

- ・「多摩川にさらす手作りさらさらになにぞこの子のここだ愛しき」（3373）

多摩川で麻の布をさらしていた様子がわかり、多摩川が庶民の生活の中で日常利用されていたことが窺われ、このように、武蔵地域の港湾の様子が垣間見られる。

4 三浦半島の遺跡

神奈川県横須賀市夏島に所在する鉞切遺跡は、横須賀市（相模国）と横浜市（武蔵国）との境に

あたり、東京湾に面した入江状に深く入り込んだ場所である。早くから赤星直忠博士の調査があり、その際に様々な動物遺存体が出土することで注目されていた。鉞切遺跡は、7世紀初頭の牛頭やイルカを生贄にした祭祀の跡を確認している。報告者の小出氏は、『牛頭祭祀』として遺跡の調査成果を位置づけた。出土した土師器は、模倣坏、有段口縁坏、身模倣坏、続比企型坏、高坏など北武蔵の土師器が出土している。

また、神奈川県横須賀市鴨居に所在する小荷谷遺跡は、浦賀水道西岸の鴨居湾に面した砂丘上に立地する。発掘調査の結果、古墳時代後期末から奈良時代初期の遺構確認面から多量の北武蔵地域の土師器坏、甕類が出土した。

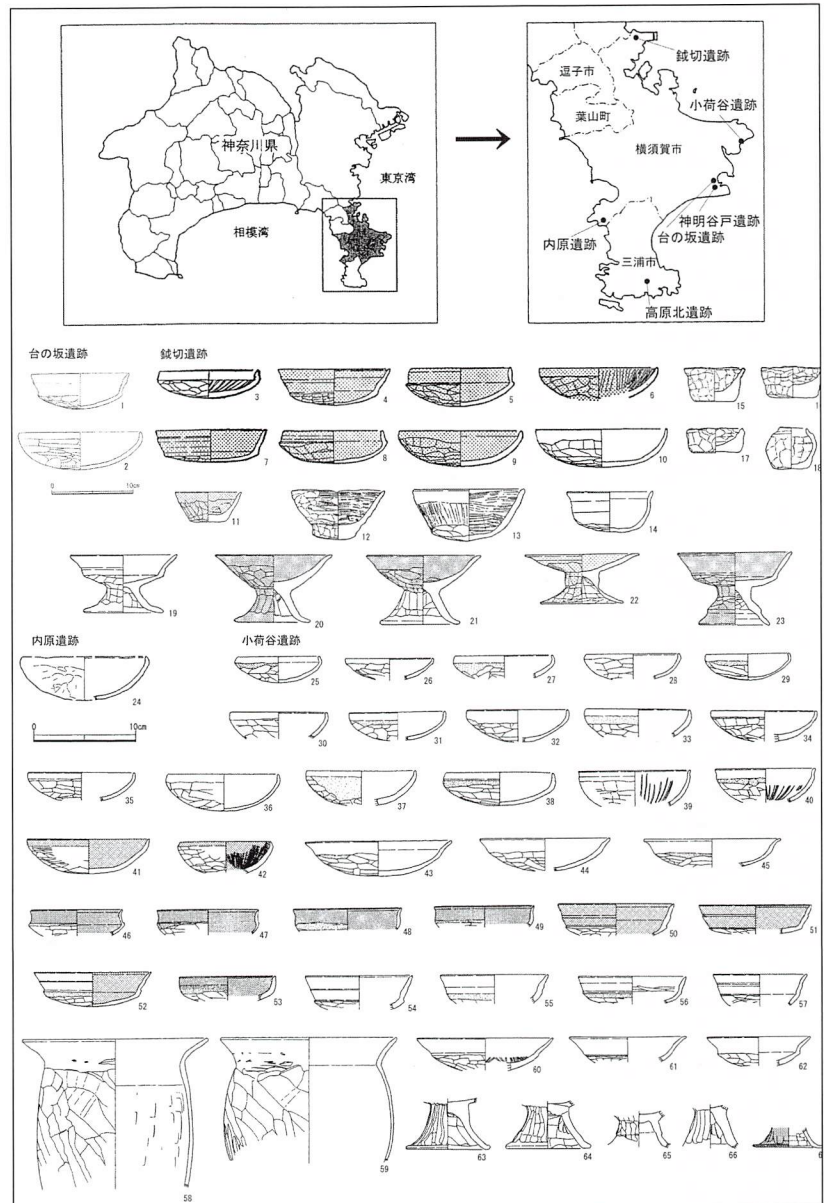
鉞切遺跡をはじめ、三浦半島の遺跡からは、漁労具である土錘や骨鏝が出土し漁村の遺跡と捉えられ、これら地域で水揚げされた魚介類が河川を利用して、多摩川、入間川、和田吉野川など西よりの内陸地域の遺跡にもたらされたと考えられる。

三浦半島の遺跡から出土した貝や動物遺存体は、下田町遺跡から発見された貝の種類と様相がかなり類似している。一方、出土する土師器は、八割以上が北武蔵地域の製品で占められ、在地の土師器は認められず、いずれも搬入されたものである。

5 古墳時代の交易

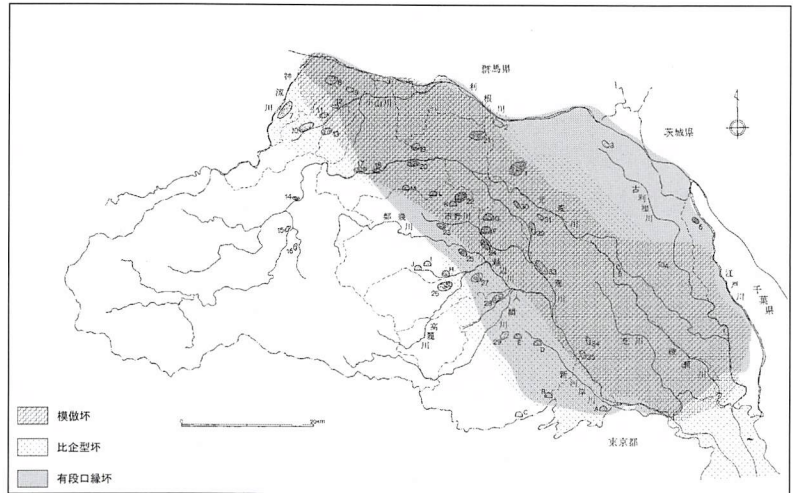
地理的歴史景観を復元すると、下田町遺跡は入間川・和田吉野川水系である。本河川の下流は、現荒川の流れと同じくして東京湾まで到達する。中流域には、和田吉野川の太里地域、市野川・都幾川の比企地域、越辺川・入間川の入間地域が存在し地域経済圏、生活圏、文化圏を形成している。また、元荒川水系には、さきたま古墳群を中心とするさきたま地域、古利根川水系には、小山川を中心とした北武蔵地域の勢力が見られる。河川交通を利用して、海の幸と山の幸が運ばれ交易が行われていたと考えられる。

土師器は、模倣坏・北武蔵型坏・比企型坏・小針型坏・北島型暗文坏などの流通が7世紀初頭段



第2図 三浦半島の土器

階から活発に行われ、模倣坏、有段口縁坏、続比企型坏が主体である。和田吉野川水系の青山古墳の所在する大里地域や比企地域、入間地域は比企型坏が丘陵部を中心に分布している。元荒川水系や古利根川水系のさきたま古墳群を中心とするさきたま地域には、有段口縁坏が広がりを持ち、この他小針型坏・北島型暗文坏が分布する。古利根川水系の小山川を中心とした北武蔵地域では、模倣坏・北武蔵型坏が分布する。



第3図 土師器坏の領域

須恵器は、7世紀後半から8世紀初頭の段階になると、末野産須恵器と湖西産須恵器が多く流通する。末野産須恵器は、東山道武蔵路や元荒川流域の河川を中心として流通し、湖西産須恵器は、海上交通を通して入間川・和田吉野川、元荒川などにより流通し、交易を想定させる。

また、緑泥片岩の移動は、元荒川の水運によって長瀨の緑泥片岩が小見真観寺古墳や千葉県木更津市金鈴塚古墳に使用されている。一方では、千葉県富津市金谷付近の海岸で採れる房州石が東京湾から元荒川をのぼって、さきたまの将軍山古墳に使用され、利根川の水運によって榛名山に産する角閃石安山岩が天王山塚古墳に使用されるなど河川による移動が考えられる。

まとめ

古墳時代後期は、人々の活動が活発になると考えられる。生産物に価値を見出し、交易物として流通圏を拡大した。さまざまな地域間交流による分配が行われ、海の幸、山の幸が手に入れられる時代であったといえる。その手段として、河川交通が発達し、交易が行われたと考えられる。

遺跡から出土する他地域の土器は、内容物を入れた容器として移動したと想定される。海産物を交易する地域は、湖西産の甕や壺を容器として、時に、甕には、海水を入れ中にハマグリを満載し河川交易により内陸部に運搬したことが想定される。

古墳時代の生業活動によって手にした海産物を広域に流通させ、交易活動を行っていた実態が下田町遺跡で把握できた。その仕組みには、まだまだ解明すべき点が多いが、ここでは、海産物と内陸部で生産された土器が河川交易により移動していたことを指摘したい。また、社会背景には、古墳時代後期に勢力を持つ在地首長が、この河川を支配することにより、交易権を手にしたことが考えられないだろうか。三浦半島や東京湾沿岸、多摩川流域などの交易に、介在した首長がどのような勢力によるものか、その鍵は、武蔵国造の乱で、朝廷に献上したとされる四つの屯倉の位置が物語っていると考えられる。これまで、多摩・入間・比企地域にとって、さらには、さきたま地域にとってこの地域が交通や交易にとって要衝の地であり、古墳時代の武蔵を探る上で新たな視点としたい。

〔本要旨は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団『研究紀要』第21号「古墳時代の河川交易－下田町遺跡へ貝を運んだ道－」の論考をもとに平成19年9月22日にさきたま講座でお話したものです。〕

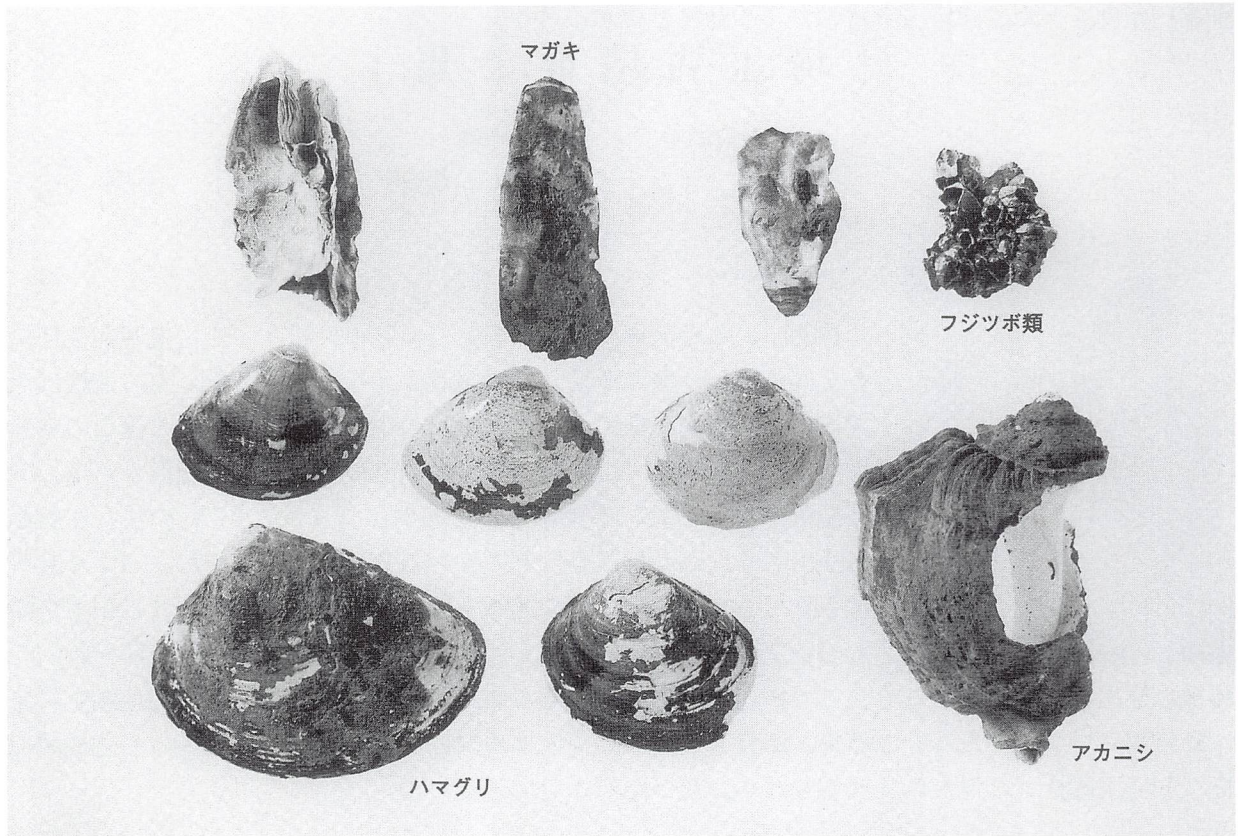


写真1 下田町遺跡出土の貝殻1

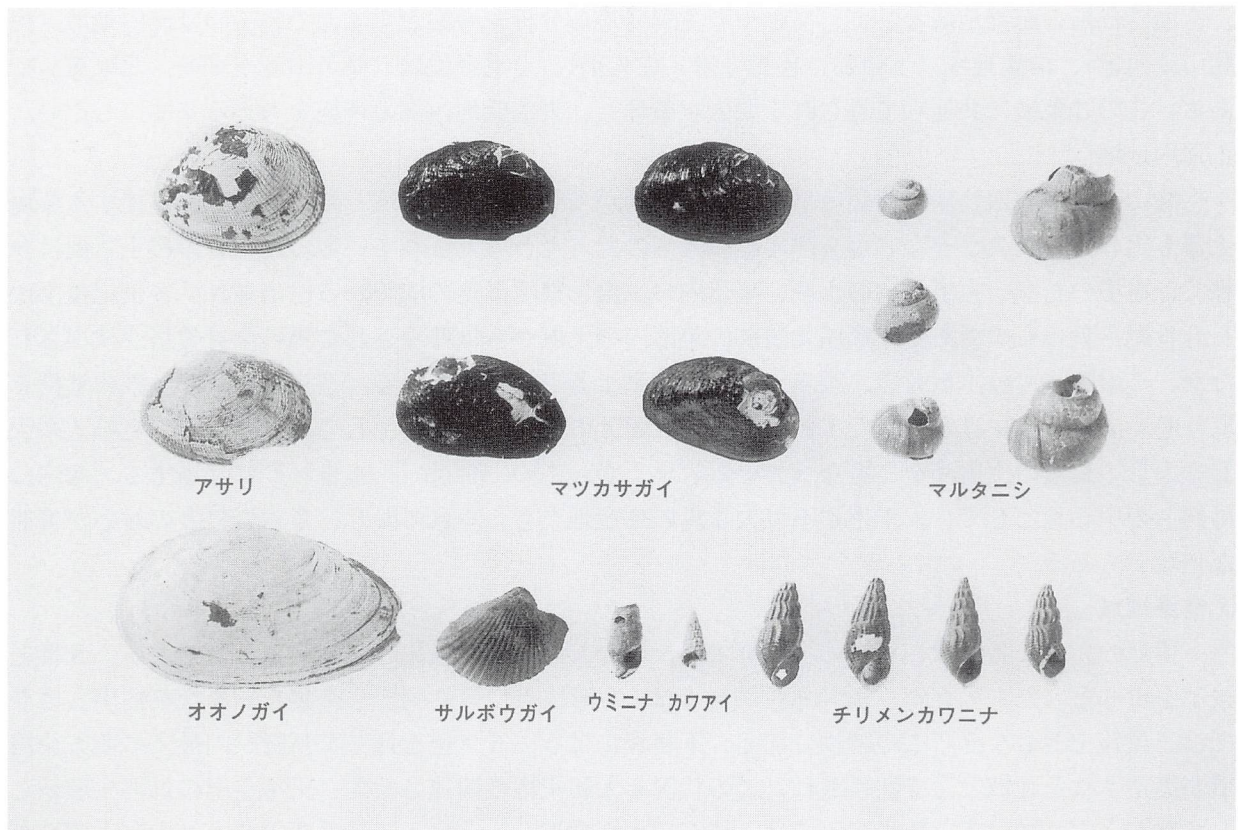


写真2 下田町遺跡出土の貝殻2